

〔日本書紀二十六〕三年九月、有間皇子性黠、陽狂云々、往牟婁温泉、僞療病、來讚國、體勢曰、纔觀彼地、病

自蠲消云々、天皇聞悅、思欲往觀、四年十月甲子、幸紀温泉、十一月戊子、捉有間皇子、與守君大石、

坂部連藥、鹽屋連鱒魚、送紀鱒湯、舍人新田部末麻呂從焉、五年正月辛巳、天皇至自紀温泉、

〔萬葉集一雜歌〕額田王歌 未詳

金野乃美草、刈蕘屋杼禮里之、兔道乃宮子能借五百、熾所念、

右檢山上憶良大夫類聚歌林曰、一書曰、戊申年幸比良宮大御歌、但紀曰、五年春正月己卯朔辛巳、

天皇至自紀温泉、

幸于紀温泉之時額田王作歌

莫囂圓隣之、大相七兄爪、謁氣吾瀨子之、射立爲兼、五可新何本、

〔萬葉集一雜歌〕中皇命往于紀温泉之時御歌

君之齒母、吾代毛所知哉、磐代乃岡之草根乎、去來結手名、

〔日本書紀二十九〕十四年十月壬午、遣輕部朝臣足瀨高田首新家、荒田尾連麻呂於信濃、令造行宮、蓋

擬幸東間温泉歟、

〔續日本紀二武〕大寶元年九月丁亥、天皇幸紀伊國、十月丁未、車駕至武漏温泉、戊午、車駕自紀伊

至、

〔千載和歌集二十神祇〕有馬の湯に、忍びて御幸ありける御供に侍りけるに、湯の明神をば、三輪の明神

となむ申し侍ると聞きて、物にかき付け侍りける、

按察使資賢

珍しく御幸を三輪の神ならば、驗あり馬のいでゆるべし

〔百練抄四四條〕仁治元年五月十八日辛巳、安嘉式乾兩女院御幸有馬温泉云々、

〔百練抄七後深草〕正元元年十月五日乙亥、自今日主上御湯治被召有馬温泉湯、